

(1) 港南区の生い立ち

かつては、港南区の東半分（上大岡・最戸・大久保・港南・笹下・日野・日野町・港南台・日野南）を武蔵国久良岐郡と呼び、その西半分（野庭町・丸山台・上永谷町・日限山・上永谷・下永谷・下永谷町・東永谷・芹が谷・東芹が谷）を相模国鎌倉郡と呼んでいました。このことは、私たちの港南区域の歴史と文化を他地区にはない程に複雑にし、また、興味の深いものになっています。

港南区の中央を走る武相国境線は、古代には五畿内七道の内の、太平洋沿岸部の東海道と内陸部の東山道を分ける重要な山稜線であり、また「港南の歴史」にあるように、大和朝廷の勢力が鉄器文明を推し広めながら通過した動脈道路でもありました。

事実、武相国境は新編武蔵風土記稿（以下、「新編武蔵」といふ）にも、「水流れる境」と記された分水嶺で、武蔵側に落ちた雨は、大岡川水系となって東京湾に入り、相模側に落ちた雨は、柏尾川水系となって相模湾

南区内にあったと考えられています。

また、港南区には当時の幹線道路であった「鎌倉下の道」や「かねさわ道」を初めとする多くの鎌倉古道が走っていました。今日、鎌倉古道の周辺に石仏が多いのも、古い時代の集落や交通路を後の時代にも利用し、発展させたためと考えられています。

更に、特筆すべきことは区内に現存する板碑の銘年号がすべて一四世紀であり、その内南北朝時代のもは北朝年号が多いことは、鎌倉を取り巻く横浜南部地帯が足利氏に強く支配されていたこと、また、墳墓形態や宗教がこの時代に激しく変化したことなどを物語っています。

一四世紀は中央アジアにおけるモンゴル帝国の興亡の衝撃を同時に受けた、ユーラシア大陸の両端にある西欧と日本が同じように動乱に突入して、封建性の再編成を行った世紀であり、その証拠資料としての板碑が港南区にも凝結した姿をもって存在しているのは貴重なことと言えましょう。

近世になりますと、久良岐郡は江戸湾防衛の一環と

に入ります。

この武相両地域の違いは、昭和三〇年代の開発前までは動植物までも明瞭にその違いが認められ、通婚などを含む村人の交渉も少なかったといわれています。

また、「凶説横浜の歴史」でも、日野川の下流に郡衙があるかと推定しているように、最近では古代久良岐郡の郡衙が笹下の中登台にあったとの説がしばしば見受けられますが、中登台周辺に石仏が多いのも、近世にその中腹を巡っていた交通路があったためであり、それらは郡衙を取り巻く官道の名残を利用したものとされています。

中世になりますと、鎌倉に武家政権の中心である幕府が置かれますが、このことが港南区に深い影響を与えることになります。

久良岐郡は鎌倉からみて鬼門に当たる良（東北）にあるため、多くの神社・仏閣がおかれしました。また、鎌倉時代特有の墳墓形態である「やぐら」も、完全な姿ではありませんが、日野八丁目「清水橋」交差点近くに現存していて、今のところ「やぐら」の北限は港

して重要視され、また、江戸の広域文化圏に入ります。上大岡駅東口の「森・杉田道」の両側に石仏が多いのも、経済交流のためだけでなく、「江戸名所図絵」にあるような文人墨客の往来の名残りとも思われます。そのように、久良岐郡の村々は江戸文化の酒脱さと規格性を持っていました。

それに対して、戸塚宿に近い相模の永谷や野庭の村々は、地方色豊かな暖かい人間性に包まれていて、その違いが武相両地域の石仏たちの姿に顕われています。横浜が開港されると久良岐郡は港の経済圏にまき込まれて行きます。そして、今まで戸塚の商勢圏にあった旧相模の村々も、いつか「横浜道」と呼び名が変わった昔の鎌倉道を通して、文明開化の横浜経済圏に吸引されて行き、今日の港南区の骨格がここで生まれます。幕末以降の馬頭観音や石碑などはその時の交流の痕跡だとも言えましょう。

このようにして、黙って立っている石仏達も、多くのことを私たちに色々と語りかけ、教えてくれているようです。